創設50周年記念
2014年度秋季大会

アーリーセッションレポート

交流・共感・感動　～未来へつなぐ～

「～夢実現～ 新体操のアスリートからアーティストへ そして、新体操の舞台は青森から世界へ」

50周年記念キャッチフレーズ「交流・共感・感動～未来へつなぐ～」を体感いただくためのアーリーセッションでは、日本発祥の「男子新体操」を青森から世界へ向け発信し続ける荒川栄氏に登壇いただきました。「日本を強くする」というFUJITSUファミリ会と同じ目的をもつ活動には、「未来へつなぐ」たくさんのヒントがつまっています。「夢実現」に傾ける情熱と揺ぎない信念、その活動をご紹介します。

世界から注目を集める日本発祥の男子新体操の技と表現力

戦前「団体徒手体操」と呼ばれ、1949年、第１回国民体育大会（国体）の正式競技種目にも採用された男子新体操。伝統ある体操競技だが、音楽に合わせ、宙返りなど筋力的で美しい四肢の動きを組み合わせたアクロバティックな競技であることは知られていない。それゆえか、競技人口が少ないなどの理由から、2008年に国体競技種目から、2012年には日本体操協会の強化部門からも外され、国際大会開催の道も閉ざされてしまった。こうした背景の中、立ち上がったのが荒川栄氏。盛岡市立高校男子新体操部を全国トップレベルに育てようと奮闘していた荒川氏は、「華々しい演技、最高の技術といった“ただの演技披露”では先はない。技術を活かす環境の場が減ることは競技人口の下降につながり、やがて競技自体を無くしてしまう。競技を見た若者や子どもたちが、『あんなふうに、なりたい！』と憧れる競技でなくてはならない」と当時の想いを振り返る。

そこから荒川氏の模索が始まった。盛岡市立高校を辞し、母校の青森山田高校の監督に就き、青森大学男子新体操部の創設に奔走。ストリートダンス技術を取り入れ、表現力をさらに豊かにし、無料公演を繰り返しながらクオリティを上げていくと、やがてメディアに取り上げられ、芸能、文化、広告界の人たちと共演するチャンスを掴むことになった。

こうして注目を集め始めると、選手の気持ちに変化が出てきたという。「プロを目指そう」。その第１号は、荒川氏が盛岡市立高校の監督時代、手塩にかけて全国トップレベルの選手に育てた生徒だという。彼は「俺が青森大学男子新体操部の第１期生になる」と宣言した通り、大学に進み、プロを目指して単身東京へ。ところが残念なことに夢半ばにして24歳の時に脳腫瘍で亡くなってしまう。しかし、荒川氏にとってプロ第１号は彼だという。なぜならその年、青森大学新体操部は、彼が好きだったBLUEの曲に合わせて団体競技に出場し、その演技はその後YouTubeから世界へ。カナダの世界的エンターテイメント集団シルク・ドゥ・ソレイユの目に留まり、彼らとの共演が実現したことにつながったからだ。

荒川 栄 氏
株式会社リンクステーション
地域活性化推進室 室長兼 社長付
（前職は青森山田高等学校
男子新体操部監督）

大舌 恭平 氏
（BLUE TOKYO リーダー）
1988 年生まれ、26 歳。会場では、ロープを使ったパフォーマンスを披露。数々の舞台やダンスイベントに出演。今後のさらなる飛躍が期待されている。

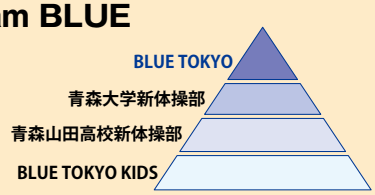
地元青森に多くの人たちを動員する力に

「既に日本一である技術をさらに高め、頑張る高校生、大学生のもっと輝ける場の提供を」と荒川氏はピラミッド体制を完成させた（図１）。BLUE TOKYO創設当初からリーダーを務める大舌氏をはじめ、これまでに名だたるアーティストのバックダンサーなどを世に送り込み、日本の男子新体操はアスリートの世界からアーティストの世界を歩むことになった。

現在、BLUE TOKYOの身体表現を地元青森の文化である「ねぶた祭」と融合させ、青森独自のエンターテイメントに育てようという取り組みを始めている。最後に荒川氏は「東北最大、日本最大級の動員力を誇るねぶた祭とのコラボが、冬の観光資源に乏しい青森に、熱気をまきおこす。さらにはシルク・ドゥ・ソレイユに負けないパフォーマンス集団に成長していく」と今後の意気込みを語った。

講演後のランチも兼ねた懇親会

Team BLUE
（図1）



荒川 栄 氏 著書
「新体操ボーイズ
～熱血先生、愛と涙の
青春奮闘記～」
青志社（2010 年）

次回公演紹介　舞台「BLUE」　～新体操で舞台を創りたい～
公演予定：2015年1月24日（土）～25日（日）　http://www.bluetokyo.jp/